設楽発掘通信

No.38
平成30年
7月号

石原遺跡の「石原」とは？

表土掘削の終わった石原遺跡では、礫を多く含む土層を掘る作業が続けられています。礫には拳大から人頭大までのさまざまな大きさがあり、丸みのある円礫もありますが、大半は角礫です。このような礫層は土石流の痕跡であると考えられます。そして礫層を除去すると、その下からは黒い砂の層があらわれました。

「これは縄文土器だねえ！」「こっちには磁器があるよ」そんな声が聞こえてきました。土器の出土する遺物包含層にたどり着いた瞬間です。こうして石原遺跡は、江戸時代以降の土石流に覆われた遺跡であることがわかったのです（図1）。

江戸時代の半ば頃に作成された川向村の村絵図には、石原遺跡とその周辺が描かれています（図2）。そこには「石原畑」という地名が記され、「荒地所」として区分されています。つまり一面に石が広がる荒地で耕作にあまり向かない土地と認識されていたのです。また同絵図では、この「石原畑」の斜め上（北東方向）にある「わで」という土地も「荒地所」とされている点が注目されます。ひょっとすると「わで」方面からの土石流が溜まって「石原畑」を形成したのかもしれません。

石原遺跡の黒い遺物包含層が絵図作成当時の地表面なのかどうかは慎重に調べていかねばなりませんが、さらに古い縄文時代にはどのような地形だったのか、包含層の先（すなわち下層）の状況が今後注目されるところです。

（愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁）

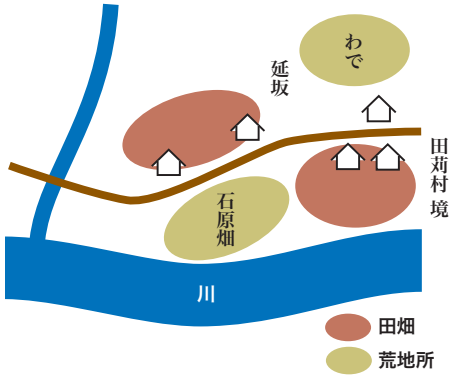

図2 「川向村絵図」（元文元年［1736年］、『設楽町誌』所収）の一部をもとに作成した石原遺跡周辺の状況図

図1 石原遺跡の発掘調査（南東から、遺物包含層の掘削作業）

石製の人形・岩偶岩版類について

平成二十九年度までに行われた設楽ダム関連の発掘調査では、岩偶岩版類と呼ばれる遺物がまとまって出土しています。すでに『設楽発掘通信』で何度か取り上げられており、当地域を特徴付ける重要な遺物であるといえます。ここでは、これまでに知られている資料を集めてみました。

図3は、平成二十九年度に調査された、小松地区のマサノ沢遺跡出土資料です。1～3は、配石墓とされた一つの土坑から出土したものです。分銅形をした扁平なものに、肩部の表現でしょうか、一面のみ横方向へ溝が施されています。同じ様な形・加工のもので、異なる大きさのものが一括して出土した事例として、注目されます。4はハート形土偶と同じ土坑から出土した資料です。楕円形の円盤状のものに、横中央には細い線刻が施され、片面にはパンツ状あるいは腰蓑状の文様とおぼしき密集した線刻が付けられています。

図4は小松地区の笹平遺跡から見つかった資料です。5～11は平成二十七年度調査の出土資料、12・18は奥三河郷土館所蔵資料、13～17は個人の方の所蔵資料です。扁平な礫を用いて横（短軸）方向への線刻あるいは溝が施されているものが多い一方、縦（長軸）方向にも線刻・溝のあるもの、縦方向のみのものもあります。線刻では12・13のように放射状や複雑なものもあります。12・14・17では、敲打や穿孔の痕もあり、さらには12・14では赤色顔料の付着が残っていました。扁平な板状のものが多いですが、8・12は断面の形が楕円形で、厚みのあるものです。このように板状ではないものもあります。

これら岩偶岩版類は、形状から人形を表した石製品で、お祀りなどの行為によって、線刻などが入れられ、磨られ、敲かれ、穿孔されたものと考えられます。これらの資料は、東海地域ではこれまで縄文時代後期中葉以降から使用されたものと考えられてきました。ところが、マサノ沢遺跡で岩偶岩版類が出土した遺構は、縄文時代後期前葉（今から約四千年前頃）の所産である可能性があり、出土した岩偶岩版類も、この時期まで遡る可能性が出てきました。最終的には、整理・報告の結果を待つことになりますが、今後は、西尾市八王子貝塚などで多く出土する板状土偶との関連も考えなくてはならないと思われます。

（愛知県埋蔵文化財センター　川添和暁）

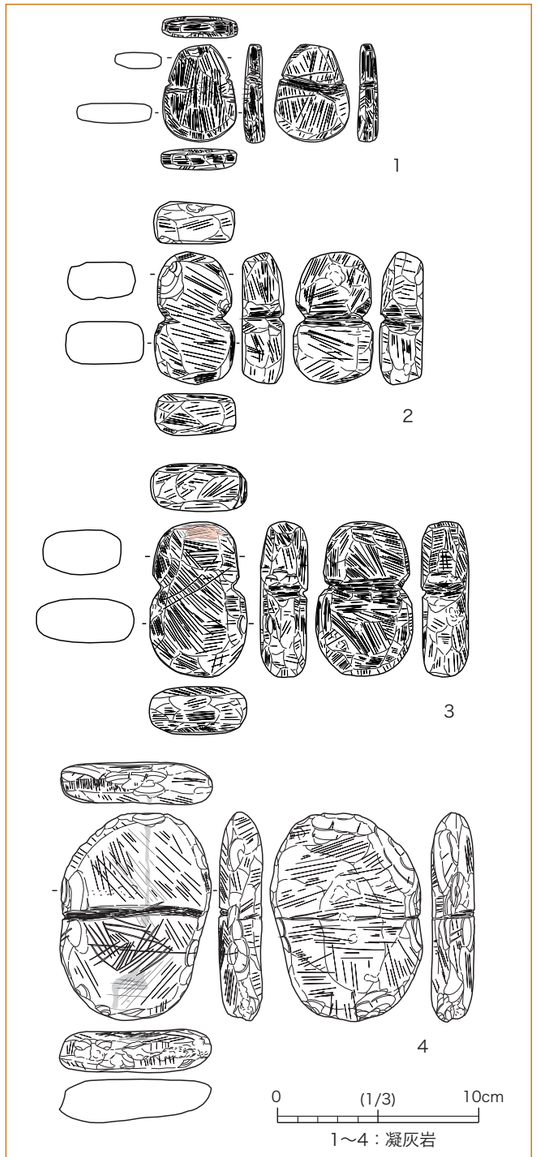

図3　マサノ沢遺跡出土 岩偶岩版類
（愛知県教育委員会蔵）

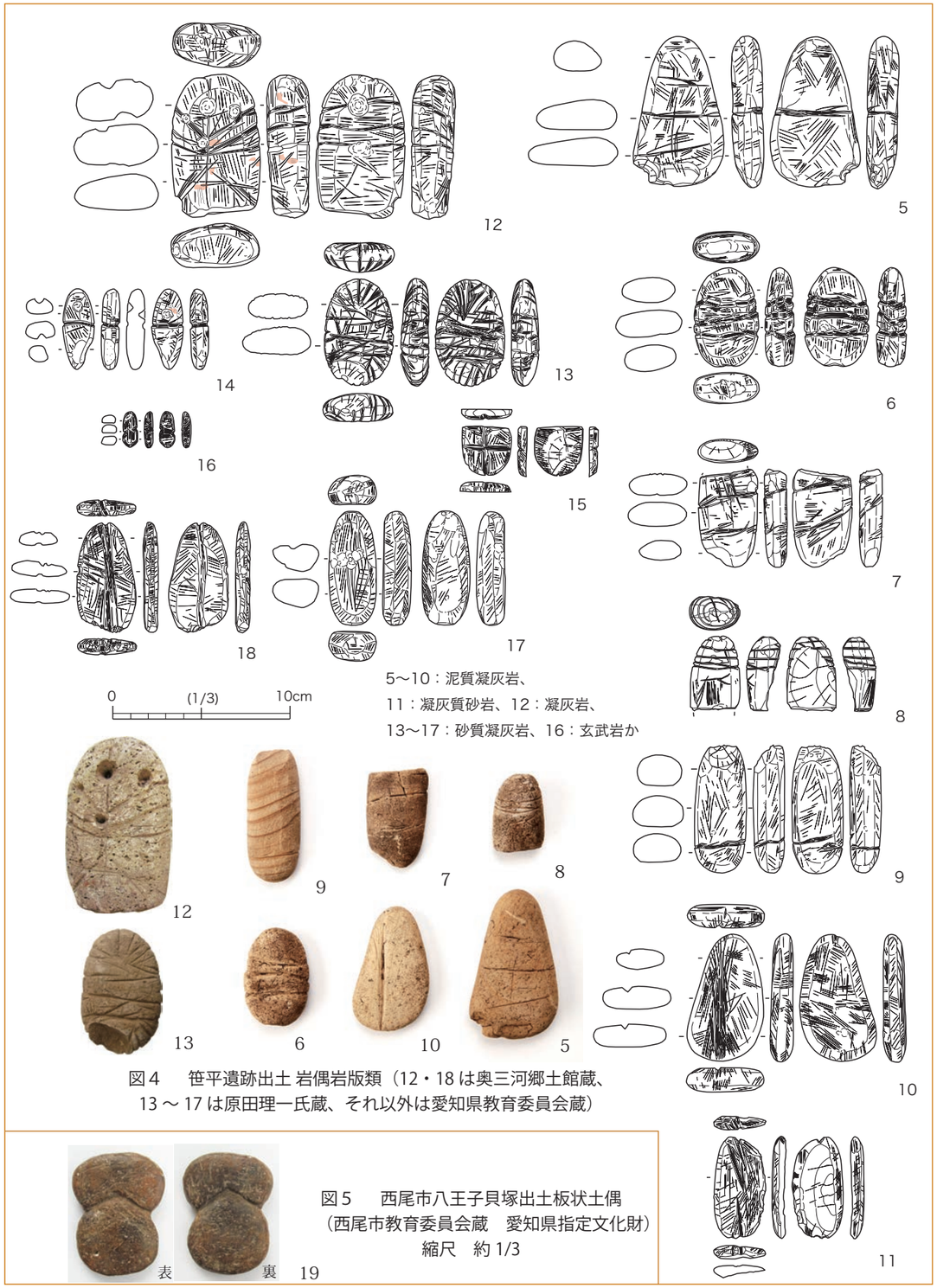

図4　笹平遺跡出土 岩偶岩版類（12・18は奥三河郷土館蔵、13～17は原田理一氏蔵、それ以外は愛知県教育委員会蔵）

図5　西尾市八王子貝塚出土板状土偶
（西尾市教育委員会蔵　愛知県指定文化財）
縮尺　約1/3

石原遺跡の調査

六月から実施している石原遺跡の発掘調査は、A・B区と調査区を東西に分割したうち、現在はA区（東側）の調査の真っ只中です。東端より、重機による表土掘削から開始した後、人力による掘削作業（包含層掘削～遺構検出）に主な作業が移ってきました（作業工程の流れは設楽発掘通信No.三七を参照）。

A区東側では、縄文土器や石器などが出土する遺物包含層が一定の広がりで残っていることが、調査区の端に設定したトレンチにおいて確認されました（図6）。層の広がりを平面と断面で捉えた後に掘り下げていき、掘り終えたところで遺構を探す（検出する）ことになります。果たしてどんな遺構が見つかるのか、期待はふくらみます。

一方、A区西側（遺跡中央部付近）では、角礫を多く含む土石流堆積層が地山直上まで堆積しており、広範囲にわたって遺物包含層が流されて消失している状況が分かってきました。地山や残っている遺物包含層（図7）には、人頭大かそれ以上の大きさの礫が多く喰い込んでいる状況が見られ、まさに「石原」という字名にふさわしい景観が現れてきました。

図6 トレンチ内遺物出土状況（南から）

図7 A区西側土石流堆積層除去面
（南東から、手前の黒色土は遺物包含層）

遺物は、地点によって多い少ないはあるものの、今までのところA区全域から出土しています。特に上述の遺物包含層からの出土点数が多く、縄文時代の土器（図8）や石器（図9）から、近世以降の磁器（図10）までが混在して出土していたり、場所によっては縄文時代の石器よりも下位から中近世の陶磁器が出土していることもありました。これは上述の土石流や植林前まで行われていた水田や畑などの耕作によって攪拌されたものと考えられます。

図8の縄文土器は、境川に面した調査区南端部から出土したものです。破片ではありますが、「沈線」と呼ばれる文様がはっきりと見られ、今後より大きな破片が見つかることが期待されます。

（安西工業株式会社　鷺坂有吾）

図8　縄文土器（西から）

図9　黒曜石剥片（南から）

図10　磁器（南から）

設楽発掘通信
No.38
平成30年7月号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24
電話　（0567）67-4161【管理課】　4163【調査課】
ホームページ　http://www.maibun.com
Facebook　https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter　https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力　安西工業株式会社